


 書評

 日本社会精神医学会 編
社会精神医学

西園昌久

わが国における現時点での社会精神医学の到達点

社会精神医学は実践の医学である。カントが「理論なき行為は暴力であり、行為なき理論は空虚である」と述べたといわれる。社会変動やグローバル化の激しい今日、個人の価値観、家族のあり方、集団と個人のかかわり方も著しく変動する。また、個人の自己責任のみで生きていくことは困難である。精神障害の予防、患った人の治療そしてリハビリテーションには社会精神医学的視点とその実践が不可欠なのである。

本書は、その序で「日本社会精神医学会が総力を挙げて作った教科書である。教科書といっても学生向けというより、現時点でのこの分野の到達点を示す意味合いが強い。50 人に及ぶ各専門分野の執筆陣にもそのことが示されている。」と自負されているようにわが国の社会精神医学会がそこまで実力をつけてきたことを示すのであろう。その「序」にも 40 年前、懸田克躬、加藤正明共編の『社会精神医学』が刊行されたことが記されているが、それはわが国でまだ、社会精神医学の理論と実践が存在しなかった時期のいわば啓蒙の書であった。それに対比して本書は、この間の 40 年の精神医学・精神科医療の社会変動とかかわったある種の停滞、混乱それから再建、進歩の体験を通して到達した内容と考えられる。

本書は B5 判 480 頁からなる大著である。内容は、社会精神医学とは、社会精神医学の役割、社会精神医学研究とその成果、ライフサイクルと社会精神医学、現代社会の特性と社会精神医学、精神保健サービスの提供と学術基盤、社会精神医学と近接領域、社会精神医学の課題

と展望、日本社会精神医学会の歴史などの章立ての下個々の項目ごとに記述されている。それらを具体的に挙げる余裕はないが、読み物としても興味がそそられるテーマが論じられている。それらは、社会精神医学を超えて精神医学の本質を考えさせてくれる。また、欧米のみならず、アジア各国の精神科医療についての記載があるのも素晴らしい。

若干の意見を述べると、今日の精神医学は神経科学の発達に伴う生物学的精神医学主導で展開しているが社会精神医学はそれに対してどのような対応がなされればよいのであろうか。WHO、ヨーロッパ事務局の Rutz W (2003) は「うつ、攻撃性、自己破壊行動、自殺、暴力、破壊的スタイル」の障害が先進国に多発することを例に挙げて、ドラマチックな社会変化が脳の発達と機能に影響を及ぼしたことと関連することであり、社会精神医学も従来の社会的次元のみに基づくものから神経科学上の新しい知見を取り入れた新しいパラダイムに発展すべきであると主張している。生物学的精神医学が優位なわが国において社会精神医学の次の目標は生物—心理—社会的モデルでの発達であろう。今一つ挙げれば、近代化したはずのわが国社会にあって、今なお人の心に沈殿し、自由な判断をしばしば拘束している「ムラ意識」の問題の解明の課題である。

[Rutz W: Rethinking mental health; a European WHO perspective. World Psychiatry 2 (2): 125-127, 2003]

(福岡大学精神医学名誉教授)

●B5 480 頁 2009 定価 11,550 円(本体 11,000 円+税) 医学書院